

ある者をして社會の爲に産業を管理せしめよ、労働の
技能ある者をして社會の爲に労働せしめよ、此れは人
間の自然的分業である。要は其の生産物の分配を公正
ならしむるに在る。即ち生産の發達を企圖することと
亦協調の一要素をなすべしならぬ。……」
(註) 添田敬一郎「労働問題の歸結」社會政策時報
大正十年十月號一—五頁

然らば、斯くの如き思想的内容を持つ協調主義の期す
るところは何にか。「吾人の期するところは、一方に於
て協調の精神的基礎たる社會連帯の思想を飽く迄敷吹す
ると同時に、他方に於て其の物質的基礎たる社會生活上
の機會均等を実現せんとするに在る。さればこそ、社會

政策の徹底的實施は協調會の一標語となつて居るのであ
る。働かんと欲する者に働く機會を與へよ、働く者に生
活の保障と教養の餘裕とを與へよ、而して文化の享受に
與からしめよ。約言すれば、一切の正しい生活をして生
き甲斐あるしめよ。此れを進化の法則に従つて實現せん
とするの方法が即ち社會政策である。協調の靜態は社會
連帯の思想であり、其の動態は社會政策の實行である。
而して、社會改造の目標はより善き社會の實現に在ら
ねばならぬ。より善き社會はより善き人間に依つてのみ
形成され得る。富の專制が人類の墮落であると共に、暴
力の專制も均一人類の墮落である。資本家も自覺せよ
、労働者も自覺せよ、相互に現代社會の弊害を排除して
福祉を増進することと努めようではないか、斯く吾人は